

ゆっくりと大好きなコーヒーを楽しめるように ～行動障害を有する利用者に対する取り組み～

第2しょうせい苑 生活支援員 高松 哲平

1. はじめに

第2しょうせい苑は、平成11年4月に知的障害者更生施設として開設され、平成23年10月に指定障害者支援施設に移行した。現在は定員50名の施設入所支援、定員68名の生活介護事業を行っている。開設から20年が経ち、利用者の高齢化、重度化が進む中で更に行動障害者への対応・支援が課題となっている。当苑でも県内外の専門施設の見学、行動障害に関する研修に積極的に参加し、また外部講師を招いて実際の支援困難な事例に対して助言をもらう等、職員のスキルアップ、知識・支援技術の向上を図っている。

今回は行動障害を有するAさんに対して外部講師のアドバイスをいただきながら行ってきた支援の取り組みについて紹介する。

2. プロフィール

<氏 名> : Aさん

<性 別> : 男

<年 齢> : 29才

<手 帳> : 療育手帳A

<障害支援区分> : 区分5

<障 害> : 知的障害、自閉症

<利用形態> : 通所生活介護

<服薬状況> : リスペリドン1mg (朝1、昼2、夕1) ザイザル5mg (夕1)

<家族構成> : 父、母、弟、妹

<性 格> : 臆病で周囲のことを気にしてよく見ている。

<コミュニケーション>

: 自分の要求を何度も訴える。簡単な単語を発するが、会話はオウム返しが多く成立しない。

<そ の 他> : 要求が伝わらず興奮状態になると他者を突き飛ばしたり、相手の顔面へ頭突きする等、暴力行為が見られる。また、突発的な器物破損や自傷行為(爪はぎ)等の問題行動がある。

月に2～3回2泊3日を基本とした短期入所を継続して利用している。1日の中で感情が変化しやすく、人と関わりを持つことが苦手であり、主な活動以外の時間は出会いの家(多目的スペース)の1角に設けた個室で過ごしている。ユニット活動は平成30年4月より、高齢者・重度の方を主として体力作りや創作的活動を中心に行うのびのび班から自閉症の方を中心に個々の特性に合った自立課題や運動等を一連の流れにして活動を行うみどりの班へ異動した。

3. 問題行動

H28年3月頃からAさんが所属していた活動グループの活動終了時に、ティータイムとしてコーヒーを参加利用者に提供していたが、H29年3月から4月にかけてそのコーヒーを飲むことに対しての強いこだわりが見え始めるようになる。日々の日程等に関係なく、午前の日程が終盤にさしかかる頃になるとコーヒーの要求が始まり、すぐに対応できなかつたり支援員からの声掛けがAさんの意に反した内容であったりすると、コーヒーを保管している部屋のドアの破壊、ドアへの頭突き、他者を押し倒す等の行動が増加した。H29年9月頃からはコーヒーカップ1杯（150ml）では納得できず2杯目の要求が始まる。1杯飲んでいる事を説明するがAさんは納得できなくなり、前述の問題行動を繰り返すようになった。

4. Aさんの問題行動を通して浮かび上がった課題点

（課題点1）支援員全体がAさんの障害特性への理解や、行動障害を有する利用者に対しての支援方法のノウハウがない。

（課題点2）コーヒー1杯では納得できなくなり、2杯目の要求を行うようになった。

（課題点3）Aさんが日程を理解できず、いつコーヒーを飲めるのか不安になり毎日支援員室に来て問題行動を繰り返してしまふ。

（課題点4）Aさんに対しての具体的な支援方法が確立できておらず支援員間で支援の統一が出来ていない。

5. 課題点に対して取り組んだ具体的事項とAさんの状況・支援経過

【課題点1に対して】

外部講師を招いて定期的に行動障害に関する研修を実施し、行動障害に関する支援の知識、技術を身につけ、Aさんに対する具体的な支援についても外部講師のアドバイスをいただく。

～具体的取り組み事項～

H28年度から年間3～4回程度、外部講師をお招きして行動障害を有する利用者への支援方法や知識を学び、併せてAさんに限らずその他の行動障害を有する利用者についても実際の生活の場を見ていただき、現状に合わせた支援方法についてのアドバイスをいただく。外部講師についてはH28年度以降毎年苑に来ていただき、現在も対象利用者の状態等の変化に即した的確な支援方法の助言をいただいている。

Aさんに限らず講師からの助言を得て実際に第2しょうせい苑で取り組んだ自閉症や行動障害を有する利用者への具体的な支援について数点以下に紹介する。

（例1）行動障害を有する利用者に対して、これまで情報提供や助言等は口頭での声かけが中心であった為上手く情報が伝わらず誤解や混乱を招くことが多かった。そこで自閉症評価キットA1（15歳以上の青年・成人用、重度の知的障害を伴う）で各々の評価を行い、そこで得られた情報から対象利用者の得意な事に着目し、個々に分かりやすい情報伝達ツールを用いて情報提供を行う事とした。

（例2）行動障害を有する利用者に対して施設の日程や生活時間、対象利用者への基本的な支

援が記入されたシートを用意し、そこに日々の生活状況や生活の様子、支援を通しての利用者の動向や支援員の気づき等を随時記入し情報を積み重ねていく「行動観察プログラムシート」を作成し、それぞれの利用者の傾向や有効な支援方法の組み立てを図る材料とした。

(例3) 生活介護では今まで、こだわりの強い自閉症を有する利用者が他の多くの利用者と一緒に出会いの家(多目的スペース)で過ごしていた。その為苦手な音や刺激が多く存在し落ち着く事のできる空間もない事で絶えず刺激を受けて興奮や問題行動に発展するケースが多くあった。

そこで刺激抑制の為に仕切りカーテンを使って自立課題を行うスペースや休憩、余暇時間を過ごすスペース等をそれぞれ配置する物理的構造化を行い、併せてスケジュール表も使用して具体的に情報を伝える事とした。その結果、自閉症を有する利用者は刺激が少ない環境の中、見通しを持って生活することで落ち着いた生活が送れるようになってきている。

【課題点2に対して】

今まではコップ1杯(適量)の提供であったが、納得できず問題行動に繋がる事も多かった為、2杯目のコーヒーも可とし、併せてAさんがコーヒーの終わりを視覚的に理解しやすくする為毎日同じ量のコーヒーを提供する事とし、コーヒーの終わりを視覚的に分かりやすく提示する。

～具体的取り組み事項～

コーヒーの終わりが視覚的に分かるよう計量器、コップを準備。(写真1)「Aさんには見えない場所で計量カップに300ml注ぐ」→「Aさんに計量器に入ったコーヒー、コップを持って行く」→「コップに1回150ml注ぎ2杯分提供する」→「空になった計量器を見せ、これで終わりですと声掛けする」→「計量器とコップを回収する」の流れを統一し実施する。支援の結果、Aさんは3杯目以上の要求をすることがなくなり、以降現在に至るまでそれ以上の要求もない。

(写真1)



【課題点3に対して】

コーヒーを飲むまでのスケジュールを写真で視覚的に伝える。

～具体的取り組み事項～

スケジュール表（写真2）を作成し日付、曜日、**お茶**→**作業or散歩**→**コーヒー**を掲示しAさんがどのタイミングでコーヒーが飲めるのか視覚的に分かりやすいようにした。朝、Aさんが登苑し自室でお茶を飲み終わった後、支援員が写真を指差しながら当日の日程を説明する。日々の支援の継続でスケジュール表通りの日程をクリアして行けばコーヒーが飲めるという理解の植え付けという点では成功したが、次第にAさんは早くコーヒーが飲みたいが為に、お茶を飲んですぐに作業や散歩に行きたいとの要求が増えるようになってしまった。そこで、保護者から家では掃除機を使って簡単な掃除が行える事やソファで横になることを好むとの情報があった為、作業や散歩に行くまでの日程に掃除と休憩（ソファに寝る）を取り入れ、**お茶**→**掃除**→**休憩**→**作業or散歩**→**コーヒー**と基本の流れを変更した。以降、Aさんの当日の調子によっては掃除に時間がかかってしまったり掃除を早く要求することはあるが、お茶を飲んですぐの作業や散歩の要求は見られなくなった。また、保護者に登苑をできるだけ同じ時間にできるよう配慮してもらい、可能な限り時間間隔のずれが生じない事への配慮も行った。

（写真2）



【課題点4に対して】

支援員間での支援方法がバラバラで、Aさんが混乱しないようにAさん個人の支援指示書を作成し全支援員が統一した支援を提供できるようにする。

～具体的取り組み事項～

支援員がそれぞれ違った支援、関わりを持ってしまうとAさんは混乱しそれが原因で問題行動へと発展してしまう為、以下（表1）のように支援指示書を作成し支援員皆が統一した支援を提供できる事とした。支援員がこの支援指示書をもとに統一した支援、声掛けを行うことでAさんに安心感が生まれたように感じ、また支援員側についても皆が同じ支援を行う事で何か問題が起こった際に情報共有が行いやすく、更により多くの支援員の総合的観点から次の支援の展開を図れる事に大きな感触を得る事ができた。この支援指示書については現在も定期的に見直しを行い、Aさんが安定して生活できるよう情報共有を図った上で柔軟に改良している。

(表1)

	本人の動き	対応職員	支援内容	ごだわり発生時の対応
8:30	当院前	早出	・お茶・スケジュールをセットする。	
	出勤	受け入れ職員	・出会いの家のカギを開けて自宅へ送還する。 ・午前中の日程を口頭で説明する。 ・コップを回収する。	・当院前不安な様子や感情、男性様に来る等が見られた場合は早めに作業種移動、ウォーキングを実施する。 ・不安定な場合は可能な職員が付き添い、把握を行う。
9:00	承認時間	AM1 (早)出	・出会いの家・自家の掃除機かけをしてもらい職員は男性様に預る。 ・掃除が終わったらソファで横になってもらう。(ゴロンして良いよと声かけ)	
9:50	作業	ユニット活動参加職員	①自立課題 ②ウォーキング ③ティータイム ④CD視聴	・基本は9時30分に職員が作業種に送還実施。(送還職員は男性朝礼で決定)ごだわり等で本人が移動しない場合は移動するまで見守りを行う。 ・お茶が9時30分以降の場合はお茶を飲んで居て作業種へ送還する。 ・①～③の順番で実施。 ・ティータイムを持つてもらうことはしない。ウォーキング時は状況に応じて付き添いを行う。 ・自宅に戻る際はタイマーをセットし音が鳴ったら写真を見ながら出勤し帰ってもらう。
10:00	ユニット活動以外	活動参加職員	・活動参加 ・本人不調時は自宅でTV視聴	・基本的には9:30からウォーキング後ティータイムであるが本人から要求があった場合は持つてもらわずウォーキング、ティータイムを早めに行い活動参加又はTV視聴を行う。
11:30	昼食	(早)	・食事を自宅1)持つていく	・現在、コーヒー提供後の再度要求は見られていない。

コーヒーの提供方法・軽量カップ、本人用コップを所持移動調整、作業種にそれぞれ用いるのを確認しています。軽量カップに30cc～300mlの注ぎカップで2杯飲んでもらうことになっています。これでおしまいでありますことお伝えし、それぞれの定位置へ片づけをお願いします。
 ※最近ドアの締結等のごだわりが多く見られます。特に休館利用時や短期入所時多いので本人の行動をよく確認して下さい。
 ※男性様に寄りかかると押し合いになり見られれます。待つことが苦手な為、早めの対応をお願いします。

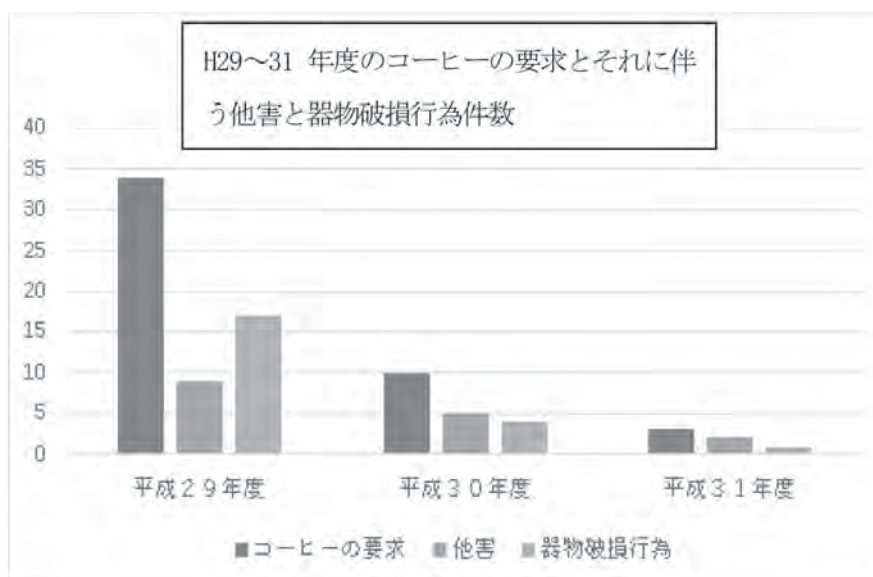
6. 考察

Aさんのように行動障害を有する利用者に対して、今までは支援員一人ひとりが場当たりの支援を行っていたが、施設外研修等で行動障害を有する方への支援についての知識や理解を深め、更に施設内研修で外部講師を招き、実際の支援の現場、本人の様子、状態を見ていただき、必要な支援についての的確なアドバイスを元にした支援が提供できた事がAさんの問題行動の減少に大きく影響したと言える。

具体的な支援方法の一つとしてのコーヒーの提供方法については、ただAさんに適量のコーヒーを飲んでもらい終わりということではなく、量や提供方法の一つひとつを設定しAさんが納得しやすい方法を確立した事、スケジュールに関しても、最初はスケジュール表の理解そのものが半信半疑の中で行っていたのだが、継続・統一した支援を行っていく事でスケジュールを見てある程度の1日の流れをAさんが理解できるようになった事が重要であったと考えられた。ある日Aさんが自らスケジュールの写真を入れ替え自分で日程を変更したことがあった。年齢的に新しい事が吸収できにくいと思われる利用者も支援を通して新しい事を少しでも吸収していく姿に支援員皆が今まで行ってきた支援の方向性が間違っていないという確証を得られたと共にAさんの支援に関わった多くの支援員の自信に繋がった事も今後の支援を行っていく上で大きな財産になったように感じた。支援指示書についてはAさんが安定して過ごせるように支援員全体で試行錯誤しつつも、手順と方法が確立された事で、Aさんが混乱のない生活を送れるようになったことに大きく関与した。これらの総体的結果として問題行動の減少に繋がったと考えられる。

以下(表2)に平成29年～31年度(年度途中)の確認できたAさんの「コーヒー要求」「他害」「器物破損行為」の年間件数をグラフで計上する。

(表2)



7. 終わりに

Aさんへの支援を通して、問題行動の減少という良い結果を得ると同時にAさんの不安を少しでも取り除き、徐々にでも安心した生活が送れるようになっていることを大変うれしく思う。しかしAさんに対する課題と必要な支援はその他にも多くある。今後も行動障害に関する知識や支援技術の向上を目指し、Aさんが今後もより安心した生活が送れるように支援をしていきたい。また、Aさんのみならず、第2しょうせい苑を利用している全ての利用者についてもより本人の特性に配慮したきめ細かい支援を提供し、皆が少しでも多くの幸せを感じられる人生へのお手伝いができるよう今後も支援員としての研鑽を積んでいきたい。